

入学に際して

工学部長 佐々木 和夫

どなたか物識りの方が、スクールの語源はスコールで「楽しみ」を意味すると言っていた。真偽のほどは知らぬが、さもありなんと思う。

特に、19世紀以前の自然科学には、それを発展させた大多数の人々にとって「遊び」の

要素があったことは否めない事実である。ゲームに興じたり、スポーツを楽しんだりするうちに、自然科学の研究は知的好奇心を満たしてくれる遊びの一形態であった。現在でも学問に遊びの要素があるのはよく言われることなのだが20世紀も特に後半になって、アメリカの合理主義や競争原理が先行したために、遊びとしての学問は影を薄くしている。

だが、20世紀の後半は、歴史的に見ると異常な時期と見た方がよさそうだ。遠からず遊びが学問の中に復権するであろうと私は予測している。遊びや遊ぶ楽しみは、精神的余裕の上になり立つ。精神的余裕を与える一つの主要な条件は経済的な余裕にある。これが私の予測の根拠である。

大学に入学した今、心にゆとりをもってほしい。その上で、諸君は学問を楽しんでほしい。学問が楽しみであるか、苦痛であるかは諸君各自の取り組み方一つにかかっている。どんなに努力しても苦痛ばかりと悟ったら、そんな学問はさっさと辞めたらよい。人生には他にも色々な可能性があるのだから。

「夢」から「現実」へ

工学部4学年

三浦智哉

「夢」という言葉がある。新入生のみなさんはこの言葉から何を想像するだろうか。教師、サラリーマン、政治家、プロ野球選手、奥さんなどいろんな言葉が想像されると思う。みなさんが今まで抱えてきたいろんな事が思い浮かんでくるだろう。

では「現実」という言葉から何を想像するだろうか。私にはみなさんが想像するものがわからない。しかし、みなさんが想像した「夢」と「現実」との間には少なからずのギャップが存在すると思う。

大学というところは、自分が今まで抱えてきた「夢」をさらに大きくふくらませ、その「夢」と「現実」とのギャップを埋めることだと私は思う。しかし自分が行動せずには「夢」もふくらまないし、「現実」とのギャップも埋められない。だから、まず自分から行動してもらいたい。そうすれば何かが生まれるはずだ。そこから自分の「夢」をふくらませてもらいたい。そして「夢」を「現実」に変えてもらいたい。



工学部高層棟の屋上から講義棟、ぶどう池を望む
遠方には教育学部の建物も見える